

Title	京大広報 No. 378
Author(s)	
Citation	京大広報 (1989), 378: 793-798
Issue Date	1989-10-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/209299
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher

京大広報

No. 378

京都大学広報委員会



タイの葬式の際に配られる「頒布本」(物故者の肖像写真が収録されている。)

—関連記事本文795ページ—

目 次

<大学の動き>

京都大学原爆災害総合研究調査班

遭難者慰霊の集い…………… 794

<部局の動き>

故 小山睦夫教授の原子炉実験所追悼式 …… 795

<紹介>

東南アジア研究センター所蔵の

“チャラット・コレクション” …… 795

計 報…………… 796

日 誌…………… 796

<随想>

富山で四年を過して

名誉教授 桐 榮 良三………… 797

<コラム>

大学教育は“closing”か?

教育学部教授 柴野 昌山………… 798

写真集企画委員会からのお願い………… 798

＜大学の動き＞

京都大学原爆災害総合研究調査班
遭難者慰霊の集い

9月15日広島県佐伯郡大野町において、御遺族及び西島総長、井村医学部長、日高理学部長をはじめとする京都大学関係者、並びに本学医学部の同窓会組織である「芝蘭会」の広島支部の方々と地元関係者の参加のもとに、第20回目の京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者慰霊の集いが執り行われた。

この慰霊の集いは、前年までは芝蘭会広島支部の方々を中心に行われてきたが、大学全体で継承する趣旨から今年から(財)京都大学後援会の援助のもとに行うことになった。

なお、西島総長は次のような慰霊のことばを述べた。

昭和20年(1945)8月6日、原子爆弾が投下され、広島は人類史上かつてない悲惨な被害を受けました。当時、京都帝国大学では医学部杉山繁輝教授を中心に病理学研究室の先生方、また、理学部荒勝文策教授を中心に原子核物理学研究室の先生方による調査研究がこの地で始められましたのは、原子爆弾投下のわずか4日後の8月10日からでありました。

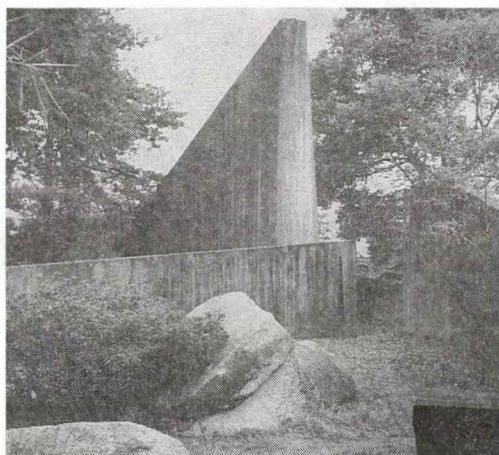
その5日後、8月15日に我が国は無条件降伏をし、敗戦の廃墟の中に国民は茫然自失、困窮の極みに陥ることになりましたが、本学では、9月10日の評議会において、この原爆災害総合研究調査班の活動を全学を挙げて支援することが決定され、医学部では杉山繁輝教授の病理学研究室、菊地武彦教授と真下俊一教授の内科学研究室、舟岡省五教授の解剖学研究室、そして理学部では荒勝文策教授の原子核物理学研究室を中心として、本格的な調査研究が行われました。

その1週間後、研究調査が軌道に乗り始めた9月17日、枕崎台風が広島を直撃し、夜の10時過ぎ、突如として起こった山津波は、この研究調査

班の拠点であったこの地の大野陸軍病院を一瞬の内に土石流にのみ込んでしまいました。

学問への情熱と人類の将来への悲壮な使命感を持って研究調査と治療にあたっておられました皆様は、建物もろとも海へ押し流されました。当時の状況については、木村毅一先生(京大広報 No. 162, 1978年7月1日)、菊地武彦先生(広島医学 39巻, 1986年6月)が詳しく書いておられます。

昭和45年(1970)9月、殉職されました皆様の御遺業を偲び、御冥福をお祈りするため、ここに記念碑が建立されました。この記念碑の建立に当たり、御尽力いただきました皆様、そして今日までこの碑を守って下さいました方々に、深く感謝いたします。



京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者慰霊碑

今年も関係者の皆様と共に碑の前に集い、当時を偲び、殉職されました11人の先生方の御遺志を思いますとき、私は改めてこの記念碑の持つ意味について考えるのでございます。核の問題は原子爆弾の投下から44年を経た今日、なおますます人類の将来に暗い影を落しております。原子核の研究は今世紀に至る人類の自然科学の最大の学問的成果

の一つであります。そこには、また、人類の将来の幸せへの学問の貢献についての限りない希望が込められております。しかしながら、それと同時に、この人間の知的営為の成果は人類そのものを悲惨なる破滅へ追い詰める恐れも秘めています。学問の成果が最も非人間的な原子爆弾の開発へとつながり、それが最初にこの広島に於いて多くの尊い人命の上に実験されたことは、人類史上の悲劇であり、許すことのできない暴挙であると共に、学問の歴史の上で消すことのできない最も深刻な汚点であることは言うまでもございません。人類が将来に真の希望を持ちうるために、そして人類の蓄積してきた知識が真の知性として、その人類の将来への希望を支え、幸せにつながることに貢献することを念じて、この記念碑は建立されたのであると存じます。この力強く天を指す姿

をしたモニュメントを、いついつまでも、我々後継者を継ぐ者の思索の道、知性ある行動への指針とすることを誓うものであります。

御霊の永遠に安らかならんことをお祈り申し上げます。

平成元年（1989）9月15日

京都大学総長

西 島 安 則

＜部局の動き＞

故 小山睦夫教授の原子炉実験所追悼式

7月12日逝去された故小山睦夫教授の追悼式が原子炉実験所主催により、10月14日（土）午後2時から3時30分まで、京都大学原子炉実験所体育館において執り行われた。

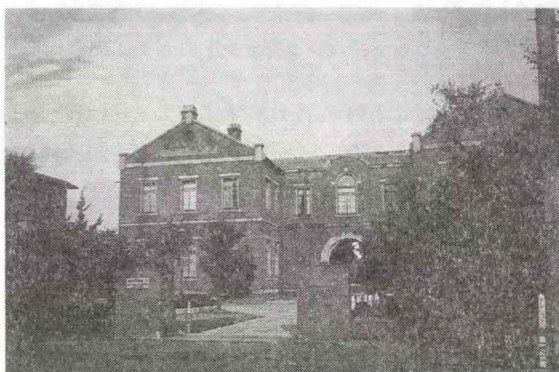
（原子炉実験所）

＜紹 介＞

東南アジア研究センター所蔵の “チャラット・コレクション”

東南アジア研究センターは、東南アジア諸地域の言語で出版された文献の組織的収集を目指して特別予算の要求を行い、まず昭和58年に第一次5カ年収集計画が認められ、現在第二次10カ年計画の第2年度が進行中である。この計画によりこれまでにインドネシア、フィリピン、ミャンマー（ビルマ）、ヴェトナム、タイなどの出版物（図書33,000冊、マイクロフィッシュ110ケース、マイクロフィルム1,100リール）が購入され、整理も順調に進んでいる。この内タイについて最も重要なものに「チャラット・コレクション」がある。このコレクションは、タイ研究者のなかで最も著名な書籍収集家として知られるチャラット・ピクン（Nai Charas Bikul）氏が40年以上の歳月をかけて収集したタイ語のいわゆる「頒布本」（Nangsu Chaek）のコレクションで、これほどの質が高くかつ量の多いコレクションは他に例を見ない。

「頒布本」は祝儀・不祝儀の機会、とりわけ葬儀の際に、すでに評価の定まった古典的著作を印刷し、これを式典の参会者に配るといふ、タイ独特の出版の形態である。その起源は前世紀末、タイ王族の一人によって始められ、それが慣習となつて普及したといわれる。もともとは書庫に埋もれていた貴重な「手書本」資料の散逸を防ぎ、印刷によって一般に普及させることを目指したもので、これにより出版者が宗教的功德を得ると信じられているものである。とくに葬式の際の「頒布本」の冒頭には、かなり長い物故者の履歴や業績

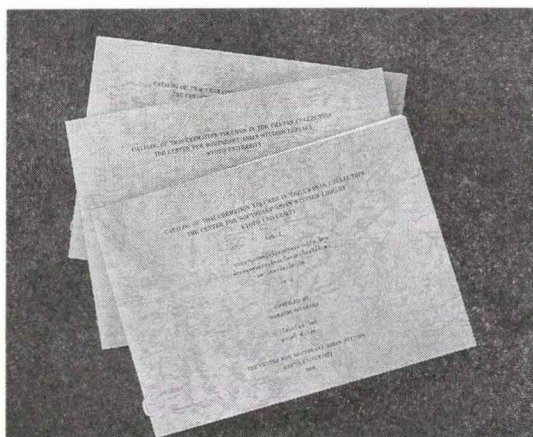


東南アジア研究センター資料部図書室

がおかれ、これがしばしば他では得られない貴重な個人情報を含んでいることから、本文テキストと並んで、この部分の資料的価値も歴史研究者などから高い評価を受け利用されている。

これまでわが国に将来された「頒布本」はいずれも個人の研究者によって収集されたものであるが、1972年に、そのユニオン・カタログが、アジア経済研究所から『タイ語文献総合目録』と題して出版され、利用者の便に供されていた。今回、東南アジア研究センターの購入した「チャラット・コレクション」は9,000冊に上るが、そのうち4,184冊が「頒布本」で、これほど多量の「頒布本」のコレクションは世界的にも貴重といわなければならない。

本センターでは、外国人研究員として招聘したマラシー・シーワラク（Marasri Sivaraks）女史の協力を得て、この「チャラット・コレクション」のカタログを完成させ3巻本として出版した。同カタログは *Catalog of Thai Cremation Volumes in the Charas Collection* と題され、コンピュータを用いて編纂したことにより、書名や著者名だ



“チャラット・コレクション” のカタログ

けでなく、物故者の名前も検索することが可能である。たとえばタイの官僚制発達史，経営史研究など，歴史的人物に関する個人情報が必要な研究者はこのカタログの完成により多大の便宜を受けることになる。

「チャラット・コレクション」が東南アジア研究センターにおいて関係研究者の閲覧に供されるようになり，かつその目録が完成したという情報

はすでに世界の研究者の注目を集めており，閲覧や関係文献コピーの要請が寄せられ始めている。本コレクションの整備により，東南アジア研究センターが世界におけるタイ研究の発展に一層の貢献を行うことができるものと期待されている。

(東南アジア研究センター)

計 報

吉村健次郎 農学部附属演習林助教授

農学部附属演習林助教授 吉村健次郎 先生は，さる10月7日逝去された。享年62。

先生は，昭和28年京都大学農学部を卒業後，民間会社を経て同37年5月京都大学助手に採用され，講師を経て同46年農学部附属演習林助教授に就任された。

この間，学生の教育・指導に熱心に取り組まれ，また，研究面では森林生態学を中心に数多くの優れた業績を残された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(農学部附属演習林)

日 誌

(1989年9月1日～9月30日)

- | | | | |
|------|---|-----|--|
| 9月1日 | 総長，ドイツ連邦共和国 München 大学 W. Steinmann 学長と学術交流に関する覚書交換 | 20日 | 国際交流委員会 |
| 11日 | フィンランド共和国国会議員文教委員会 E. Pystynen 委員長ほか19名来学，総長及び関係教官と懇談 | 25日 | 学位授与式 |
| 16日 | 中華人民共和国西北大学 張 豈之学長ほか5名来学，総長及び関係教官と懇談 | 26日 | 評議会 |
| 18日 | マダガスカル民主共和国 Antananarivo 大学 R. Ranjeva 学長来学，総長及び関係教官と懇談 | | アメリカ合衆国最優秀教員 T. Weeks 氏ほか1名来学，総長と懇談 |
| | ノルウェー王国 Trondheim 大学 S. K. Ratkje 教授来学，総長及び関係教官と懇談 | | アメリカ合衆国 East-West Center, Lee Jay-Cho 所長来学，総長及び関係教官と懇談 |
| 19日 | ドイツ連邦共和国研究科学省 Bernhard Döll 局長来学，総長と懇談 | 27日 | 同和問題委員会 |
| | 中華人民共和国第一歴史檔案館 鞠 德源研究室主任来学，総長及び関係教官と懇談 | 29日 | 防火委員会 |
| | | | 連合王国教育科学省 R. Jackson 政務次官ほか4名来学，総長及び関係教官と懇談 |
| | | 30日 | 木材研究所，農学部林産工学教室公開講座「木の文化と科学」(以後，10月7日) |
| | | | ドイツ連邦共和国 Münster 大学 Hans-Uwe Erichsen 学長ほか1名来学，総長及び関係教官と懇談 |

